# 病院の外へも…

## 在宅医療への取り組み

我が国の医療は、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの実現に向けて進んでいます。
今までの医療は病院に入院しての治療が中心でしたが、在宅医療が充実し、自宅などの住み慣れた環境で療養を行うことで、自分らしい普段の生活を続けることが可能になりました。「病院に入院していないといざという時どうしたらいいんだろうか？」そんな心配をなくすために、病院やかかりつけ医と連携できる体制で療養すること、そして、24 時間対応の訪問看護サービスを活用して、万が一のリスクにも備える工夫が進んでいます。病院薬剤師は薬の専門家としての技術と知識を最大限に活かして、病院と在宅医療をつなぐ大切な仕事をしています。
かかりつけ医、かかりつけ薬剤師、訪問看護師やケアマネージャーに退院時からの服薬情報を伝え、在宅時の最適な服薬の方法を提案し、患者さんご自身とご家族の QOL（生活の質）を高める仕事をしています。

## 日本病院薬剤師会ホームページのご案内

**http://www.jshp.or.jp/**

**おすすめのページ**

●施設紹介
日本病院薬剤師会会員施設より、会員施設の魅力満載の紹介文を掲載しています。

●プレアボイド広場
薬剤師が薬物療法に直接関与し、薬学的患者ケアを実践して、患者さんの不利益（副作用、相互作用、治療効果不十分など）を回避あるいは軽減した事例を報告しています。

〈企画・編集〉一般社団法人日本病院薬剤師会　広報・出版部　2018.9
〈発行〉一般社団法人日本病院薬剤師会　〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-12-15 日本薬学会長井記念館 8 F　TEL：03-3406-0485

# 知りたいという気持ち
# 伝えたいという気持ち

**お薬に関して疑問がありましたら何でもお尋ねください。**
**かけがえのないあなたとあなたの大切な人にこそ聞いてほしい。**
**私たち病院薬剤師の願いです**

一般社団法人
日本病院薬剤師会
Japanese Society of Hospital Pharmacists

# あなたが知っている病院薬剤師の仕事は？

私たち病院薬剤師が、病院の中でどのような仕事をしているか、ご存じですか？
みなさんが普段、目にされているのは、このページに紹介してあるような姿ではないでしょうか。
私たち病院薬剤師は、病院の中で使われるすべての「薬」について、
安全で効果的に使用されるように関与しています。
薬をとおして、患者さんにより安心して医療を受けられるように、
そして、１日も早く回復できるように、責任をもって仕事をしています。

## 調剤

錠剤・カプセル・粉薬・
シロップ剤・注射剤の調製

## 薬の管理

麻薬や毒薬・劇薬などの特別な薬の厳重な
保管管理や個々の薬に合わせた保管管理

## 薬の説明

「お薬相談コーナー」や外来のお薬お渡し口、病棟
で薬の使い方や注意しなければならないことを説明

## 特別な器具を用いる 服薬支援

### 吸入剤の支援

吸入療法は正しい方法で確実に吸入できないと充分な効果が期待できません。吸入薬の種類は大変多く、吸入手順も少しずつ異なるため、薬剤師による吸入支援がとても重要です。

### 自己注射剤の支援

糖尿病や不妊症、リウマチなどの治療薬には自宅で患者さんご自身が注射する薬があります。使用している注射剤によって使用方法が異なりますので、薬剤師による自己注射支援がとても重要です。

**※調剤**
**医師や歯科医師から処方せんが発行された際に、薬剤師は、患者さんの安全を確保するために、患者さんのアレルギー歴や体調等の情報を収集し、処方せんの内容が患者さんに適切かどうかを検討します。その際、薬の量や飲み方、飲み合わせなど、処方内容に疑問を感じたときには、処方した医師や歯科医師に確認します。このように、処方内容に問題がなく患者さんの安全が確保されていることを確認した後、薬を調製します。そして、調製された薬に間違いがないかを再度確認して、患者さんが薬を適正かつ安全に使用していただくよう、患者さん個々に応じた使い方や注意事項などを説明して、薬をお渡しします。さらに服用後の薬の効き方や症状の変化を観察して、薬物治療の評価と問題点を把握し、医師や患者さんにその内容をお伝えするとともに、次の処方を提案しています。このように、「調剤」とは「処方せんの確認から薬の調製、効果や副作用の評価、処方提案」にいたる一連の流れ（医薬品適正使用サイクル）を意味しています。**

# より安心できる薬物療法を提供するために

## 私たち病院薬剤師は、薬の専門家として、患者さんの治療や安全に関わっています

### 教育

病院薬剤師は、次世代を担う医学部や薬学部の学生に対し、薬の専門家として、薬の適正使用に関する教育を行っています。

### 医師と協働

薬の専門家として、薬がより安全で効果的に使用されるよう医師と話し合っています。患者さんに適した薬や投与量・投与方法を薬剤師から積極的に提案しています。

### 医薬品情報

薬が安全に使用されるように、つねに最新の医薬品情報に目を通しています。その中から、薬に関する様々な情報を受け取る人がわかりやすいように加工し、患者さんや、医師や看護師などの医療スタッフに提供しています。

### チーム医療の推進

医療に携わる専門スタッフがそれぞれの分野を生かして分担・連携し、より良い医療を提供しています。そのような中、薬剤師はチーム医療の一員として、栄養管理やがん化学療法をはじめ医療安全に関する感染制御や褥瘡（床ずれ）の予防、糖尿病療養支援、緩和医療などの様々な分野で活躍しています。

### 注射剤の調製

注射剤は体内に直接投与するため、無菌かつ正確な作業であることが求められます。一緒に混ぜてはいけない薬や投与量の確認などを薬剤師が行い、調製に関わることで安全性を確保しています。

### 薬学的ケア

患者さんのそばを離れても、患者さんのケアは続きます。患者さんとお話しした内容を記載した服薬支援の記録には、患者さんごとに、過去の副作用や薬の効果の有無など、多くの事項についても確認・記録しています。
例えば、肝機能や腎機能の程度を確認し、患者さんに使われている薬の体内での動きを予測し、副作用の初期症状が出ていないかをカルテで確認します。また、退院後も、継続した薬物療法が実施されるように、入院中の情報を他職種と共有します。
このように、個々の患者さんに対して、医薬品が適正に使用されるように、薬物療法の有効性と安全性を確保する役割を担っています。

#### 血液中の薬の量を測ると何が分かるの？

体の中での薬の動きは同じ薬でも人によって差がみられます。
血液中の薬の量をもとに、個々の患者さんに最も適した薬の量や間隔を決めることで、薬の効き過ぎ（過量投与）による副作用を防いだり、より安全に薬の効果が十分得られるように治療の支援をすることも薬剤師の重要な仕事です。

# 医療の安全を守るために、様々な場面で、監査（点検・確認）を行っています

## 実際に、こうして薬による健康被害を防ぐことができました。

### 薬歴を確認し、重い副作用を未然に防止

処方せんの内容に問題がないか「処方監査」を行います。

腎不全で入院された患者さんの飲んでいた薬を確認したところ、便秘の治療薬である酸化マグネシウムを継続して飲んでいたことがわかりました。マグネシウムは、腎臓に障害がある時に飲んでいると、重い副作用が発現する恐れがあるため、医師に血液中のマグネシウム濃度の測定を提言しました。測定の結果、通常より高い値で、重い副作用を起こしかねない状態だったので、医師はこの薬を中止しました。薬剤師は、腎臓に影響のない代わりの便秘薬を医師に提案し、その薬が使われることになりました。こうしてマグネシウムによる副作用を防ぐことができました。このように病院薬剤師は、患者さんの状態を考えながら飲んでいる薬の変更を積極的に医師へ提案し、副作用の未然防止に努めています。

### 患者さんの訴えから、薬の副作用を発見

早期胃がんに対する内視鏡手術のために入院となった患者さんのもとに訪れた際に、「夜中に目が覚めてしまうほど口の中が乾く」と患者さんからの訴えがありました。普段飲んでいる薬について調べると、最近飲み始めたもので口渇（口が渇く）の副作用が起こりうる薬があることがわかり、それを医師に伝えました。胃がんの治療において大切な薬だったため、同じような効果を持つ薬で口渇の副作用が起こりにくいものへの変更を提案しました。薬を処方されたかかりつけの医師にはなかなか言い出せなかったようです。また、薬のことで気になることがあれば何でも相談するように伝えました。

### 薬の飲み合わせによる中毒を防止

気管支ぜんそく（内科）で入院されてきた患者さんの場合。
数年前よりテオフィリンという薬を飲んで、ぜんそくは良好にコントロールされていました。
ある日、心療内科を受診し、うつ病薬のフルボキサミンを飲むよう指示されました。
病院薬剤師が、この２つの薬の飲み合わせを確認したところ、フルボキサミンはテオフィリンの血中濃度（血液中の薬の量）を上げる可能性があったため、内科担当医に、一緒に服用する際は注意が必要であることを伝えました。また、医師に血中濃度の測定を提案し、看護師には副作用が発現する時の兆候を説明し、注意するように伝えました。血中濃度測定の結果、この方に自覚症状はなかったものの、テオフィリンの血中濃度の上昇を確認したため、テオフィリンの使用量を従来の半分にしました。もし、このままテオフィリンの量を減らさずに、使用し続けていたら、テオフィリン中毒となっていた可能性が高いと考えられました。薬の性質を熟知している病院薬剤師が、これを未然に防ぐことが出来ました。

測定を依頼した血液中の薬の量から使用量を調節

### かかりつけ薬剤師・薬局と病院薬剤師は連携しています

厚生労働省は、地域に「かかりつけ薬剤師・薬局」をつくっていただき、そのかかりつけ薬剤師に、患者のみなさんがかかっている全ての病院のお薬や一般用医薬品の情報を把握してもらい、「副作用や効果の継続的な確認」や「多剤・重複投薬や相互作用の防止」を行うよう指導しています。私たち病院薬剤師は、患者さんが退院後も、安心してかかりつけ薬局で調剤や訪問指導などを受けられるよう、かかりつけ薬剤師との情報共有を行っています。個々の患者さんに最適な薬物療法をシームレスに提供するためには、転院先の病院薬剤師やかかりつけ薬剤師・薬局との連携を密にすることも、病院薬剤師の重要な仕事です。

### トピックス　進歩するがん治療を支える薬剤師　～安全ながん治療を目指して～

現在、がんに対する治療は、数種類の抗がん薬を組み合わせることや、副作用を軽減する薬を用いることによって、効果を落とさずに副作用を少なくする工夫が進んでいます。また、がんに対する治療は個別化・多様化が進み、がんと共存して生活ができるようになってきました。抗がん薬で治療を受ける際、以前なら入院するのが当たり前でしたが、最近では、がんの病態に応じて、外来で通院しながら、抗がん薬による治療が可能となりました。これを「外来化学療法」と呼んでいます。外来化学療法を行うためには、がん治療に精通した専門スタッフを揃えなければなりません。もちろん、薬剤師もスタッフとして参加しています。がんに用いる薬は、他の薬以上に厳密さと注意が必要です。注射剤を中心とした抗がん薬の混合業務を含め、私たち病院薬剤師は専門性を発揮し、最新情報を揃え、他のスタッフとスクラムを組みながら、より安全で効果的ながん治療に貢献しています。